

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 9号

12月25日(水)

【福井】

足羽高等学校

女子会（サバト）は踊る

「女子会（サバト）を始めましょう。」

そこに、黒、白、鼠色のローブを着た女が3人いる。彼女たちの名前は、「クロ」、「シロ」、「溝鼠」。彼女たちはそこで自分たちの持つ魔術について語り始める
シリアスなシーンと面白いシーンでホリゾントの色を使い分けて、その場の雰囲気表現できていた。

劇が進行していく中で、キャストの話し方が変化していったことにより、劇の初めと終わりでは見ている人のイメージの落差が激しかった。そのため、より一層劇に引き込まれたという意見があった。また、登場人物それぞれの個性が光っており、特に溝鼠の冷静なツッコミが笑いを誘っていた。その一方で、観客の笑い声によってツッコミの台詞が消えてしまう部分があったので、間の取り方にもう少し工夫があればよかった。

小道具の使い方が上手いという意見も出た。特に、ペットボトルやネックレスを使った表現や、実際の野菜が使われていることに驚いた。また、ろうそくや暗幕をつかって儀式を表現していた演出がとても効果的だった。

3人はそれぞれ自分が持っている魔術について話し始めるが、溝鼠の「人を殺すことのできる魔術を持っている」という発言に呼応するように死体（ジェンドウ）が見つかり、クロとシロはひどく動揺する。3人が言い争う中で、クロとシロが、魔術がウソだと発言する。そこで、溝鼠が「9割9分9厘ウソ」という言葉を発し、実はジェンドウが死体ではなく人形だという事を知る。では、残りの1厘は何なのかということをお互いに話し合った。その結果、「本当がないとウソにならない」つまり、「ウソの中に本当がある」という仮説を立てた。だから、溝鼠の「魔女はいない」という台詞の中にも「本当」が存在し、実は魔女がいるのではないかと、そして魔女はジェンドウなのではないかという推測をした。

クロとシロは劇中で、現実の中にある不幸に対して魔術を使うことで幸せを得て帳尻を合わせていると語っている。自分たちの中では、それは表面上の幸せであり、本当の幸せではないのではないかと感じた。そこで私たちは「幸せ」の意味を考えたが答えは出なかった。私たちは、この劇が本当に伝えたかったことをまだ理解しきれていない。だからこそ、「ウソの中に本当がある」というのはどう意味なのかももう一度考えていきたい。